地獄耳倶楽部

シカゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
地獄耳倶楽部

【Ｎコード】
Ｎ９５９３ＣＩ

【作者名】
シカゴ

【あらすじ】
〈取扱説明書〉

魂はまれに、溺死することがあります。用法・用量を守って正しくお使いください。

このコンパクトディスクには、ライヴ音源のレクイエムが一曲のみ収録されています。まさしく" 沈" 魂歌です。

このコンパクトディスクを受け取られた方は、人生を投げ捨て、地獄に堕ちる特権が強制的に与えられます。いわば、地獄への招待券です。

あなたが実際にこのコンパクトディスクをリスニングされてはじめて、地獄への招待を承認されたとみなします。

このコンパクトディスクを受け取られた方は、地獄への招待を拒否する選択も可能です。その場合、最寄りの酒池肉林店にて回避手続きを行ってください。回避手続きの内容は地獄機密ですので、当店で直接説明をお求めください。

このコンパクトディスクを受け取られた方は、必ず上記のいずれかの選択を受取の当日中に行ってください。当日中に選択を怠った場合、魂は永久に消失となりますのでご了承ください。

尚、収録時間はあなたがこれまで生きてきた時間分ですので、心して聴いてください。

溺死する魂（前書き）

カートコベイン、ジミヘンドリクス、ジャニスジョプリン、ジムモリソン…ロバートジョンソン

溺死する魂

２０１５年7月3日（金）

間島志真、右から読んでも左から読んでもマシマシマ。先月に誕生日を更新して、２７才になった。大学を卒業後、サービス業の正社員に一度は就職したものの、本人曰く、ブラックゆえに一年足らずで退職し、それからはろくに定職に就かずこの歳になってしまった。ただ、何も遊び呆けていたわけではなく、ここ数年はバンド活動にいそしんでいた。

ロックバンドのギタリストというと、”ギター弾きに貸す部屋はねえ”とブルーハーツの曲に歌われていたように、世間に冷たい目で見られる時代もあった、らしい。だが、それも今は昔、この頃では芸術家も多様化し、良くも悪くも自由な活動、生き方が”野放し”にされつつある。決して立派だとか、素晴らしいだとか、認められているわけではないのだ。

もちろん、中には認められ、成功する者もいるが、よほどの天才か、一般ウケ大衆ウケに特化したヤツかのどちらかだ。そして、その実に９割は後者である。そんなヤツらは論外。魂を売っている。

才能が人生を豊かにするに違いない。そう思って、そう自分の才能を信じて生きてきた。しかし、現実はそんなに甘くはなかった。僕は特別な個人なんかじゃなく、平凡な大衆に埋もれる一人だった。それどころか、全体主義社会のシステムに組み込まれながら人並みのマトモな人生すら送れない、ただの負け犬なんじゃないか。僕は我に帰るようにそれに気付き、長く浅はかな夢から覚めたのである。２７才になってやっと。

その日、僕は仕事をきっかり定時で退勤し、お世話になった製造部の社員やパートの方々に形式的な挨拶を済ませ、早々と送迎バスに乗り込んだ。

駅前に着き、下車するや、スマートフォンを開いて時刻を確認する。１８時５分。もうすぐ”サシ飲み”の相手が来る頃だ。

僕はいわゆる派遣労働者なのだが、何を隠そう、今日は現在就業している会社での契約期間満了の日、即ち最終日なのだった。そういうわけで、この３ヶ月の間にすっかり親しくなっていたパート従業員の黒石さんに誘われ、男二人で駅前の居酒屋へ飲みに行く運びとなったのである。

ほどなくして、ゆるゆると徐行しながら黒のワゴン車が停車スペースに寄ってき、運転席からひょこりと顔を出した。にこやかに人の良さそうな笑みを浮かべている齢５０だが不思議な若々しさを感じさせる小太り男、黒石さんだ。

「お疲れ様でした」

「いやあ、短い間でしたが、色々とお世話になりました」

改めてこのような会話を交わしたのは、僕が会社から駅までの送迎バスを利用しているため、マイカー通勤の黒石さんとは別々に会社を出て駅で待ち合わせした事による。

「そこの居酒屋さん、安くて美味しいんだよ」

そう言って、彼はロータリーを挟んで真向かいに位置するコンビニ左手の、小じんまりとしたお店を指差した。

入口の上には、これまた控えめな看板に店名がある。”三九”というらしい。

「さんきゅう、ですか？」

「そう、サンキュー。間島君、出会いに感謝ですよ」

成る程、黒石さんらしいな。僕はうっすらと笑みを浮かべ、人生の先輩との出会いに感謝した。嘘ではない。彼は僕からすると、確実に人生の成功者である。人生の成功者が間近にいると、何か元気を分けてもらえるような、勇気づけられるような、そんな気がするのだ。気がする、だけかもしれないが。

２０年間、某大手自動車メーカーに勤め、２９才で結婚、翌年には娘が、さらにその翌年には息子が生まれ、２児の父となった。そして、理由あって会社を退職すると、現在の工場でパート従業員として働く傍ら、詩人として二足のわらじを履いているらしいのだ（詳しくは教えてくれないが、毎月、月刊誌に載せてもらっているらしい）。趣味に旅行にと貯金を切り崩しながら余生を全力で楽しんでいる。そんな黒石さんはとても生き生きしていて、５０代とは思えない。僕には彼こそ、紛れもない人生の成功者だと映った。

僕達は店に入ると若い女性店員に案内され、奥のテーブル席に腰を下ろした。早速、「生二つで」と黒石さんが注文する。　カウンターには常連と思われる中年の男性が一人、男の店主と向かい合って座っており、週末のためかテーブル席は案内された席以外はスーツを着た会社員達で埋まっていた。

「間島君も大変だね。３ヶ月で切られちゃうなんて」

「全くですよ。当初は9月末まで更新って聞いてたのに。そんなに僕ら、使えないですかねー」

ほどなく、女性店員がつきだしを運んできた。夏らしく、キュウリの漬物らしき一品が小皿に。乾杯してすぐ、空腹のままビールをゴクゴクと半分は流し込んだ僕は、皮肉たっぷりに吐き出した。”僕ら”と複数形で言うからには、僕と同じ派遣会社から派遣された人が他にも何人かいて、みんな契約更新がないままに切られたのだ。とりわけ僕が能無しだったからではなさそうだと思い、安心もしたが、困るのは困る。

「増産が見込めないから、仕方ないよ。安定して稼ぎたいなら、良い会社に就職しましょう」

黒石さんは度々、前に彼が勤めていた会社の美談を語り聞かせてくれた。リッチな社員食堂、充実した待遇の数々、高収入、良き出会い、、まさに至れり尽くせりだったそうだ。

「はいはい。そうですね。黒石さんも、事故さえなければ」

アルコールが回った僕はつい、黒石さんの痛いところを突いてしまう。

「そ、そうだとも。今頃はかなり出世してるはずだよ。部長くらいには、ね」

黒石さんは苦笑を浮かべる。

「よっ、部長！」

こんな感じで最初でもしかすると最後？の黒石さんとのサシ飲みが幕開けた。いや、電話番号もメールアドレスも交換しているから、その気になれば会えるには会えるが。

開始一時間ほどは、お互い食べることにも余念がなかった。店のお勧めの焼き鳥や刺し身をつまんだ。

それから僕らは、緩やかな川の流れのように、お互いの好きな食べ物、音楽、最寄りのレンタルビデオショップ、スーパーマーケットの話とライトな話題を移り変えていった。音楽の話といえば、僕は最近までバンドをやっていたということを、この時初めて黒石さんに明かした。

「なんで辞めちゃったの？」

しまった。ああ、面倒くさい。酒の力でうっかり喋ってしまい、お決まりの面倒なことを聞かれた。自業自得ではある。僕はメンバーとの音楽性の違いや方向性の不一致による、とざっくばらんに答えたが、黒石さんは僕のバンド活動にかなりの興味を示し、次々と矢継ぎ早に質問を浴びせた。とにかく面倒くさかったので、その質問事項も割愛する。

結局、いつも持ち歩いている音楽プレイヤーに入れていた、バンドのオリジナル曲を聞かせることで話題の収束と切り替えに成功した。余談だが、バンド名は”無頼ズ”と言い、ジャンルはハードコアパンク、代表曲は”ノーライフ”である。

僕はどちらかと言えばお酒に弱いが、この日は柄にもなく、数年来の親友との再会を祝うかのごとくアルコールを浴びるように飲んだ。黒石さんはと言うと確実に僕よりはアルコール耐性があるようだが、眼は充血し、顔全体が赤らんでいた。二時間が経った頃だったか。酩酊する時間の中、唐突に黒石さんが言ったのである。

「人生は手にいれるばかりじゃない。投げ捨てるのもまた、人生だ」

「はい？何言ってんすか～…あ、それ、さっき僕が聞かせた無頼ズの曲の歌詞だ！作詞したの僕なんですよ」

「君、やっぱり持ってるよ」

その時の黒石さんの眼には、何か悪魔的なぎらつきが感じられたはずだが、何しろ僕はすっかり泥酔していたため、はっきりとは思い出せない。だが、相手も相当酔っている、酔っぱらいの奇妙な言動では片付かない一幕があの時、あったのだ。

ふと店内の静けさに気付き、辺りを見回すと、あれだけテーブル席を埋めていた客がいつの間にか消えており、カウンターにいた中年男性の姿もなかった。女性店員も上がったのか、姿が見えない。どうやら今、店内には僕と黒石さんそして店主の３人だけらしい。

黒石さんはボトルキープしていたと思われる麦焼酎の残りを全て飲み干すと、パンパンと軽快に手を叩いた。何故かしら、〝幸せなら手を叩こう〟という、有名な童謡の一節が思い浮かんだ。そして、彼はこちらにやってきた店主に対して。

「大将、キープしていたあれを」

店主は一瞬何のことかと首を傾げたようだったが、すぐにああ、と”あれ”を思い当たったのかカウンターに引き返した。普通に考えて、キープしていたあれとは、ボトルキープの瓶を指すのだろうが、店主が持ってきた実物はそうではなかった。

「なんですかそれっ？」

ひどく酔っていたが、その異様さは目に焼きついた。目の前には、死神のようなモチーフが描かれた黒黒としたジャケットのＣＤが用意されたのである。ここは居酒屋だが…？

「見ての通り、”ＣＤキープ”ですよ。もう２０年以上が経ちます。いやあ、久し振りだ」

黒石さんは何やら感慨深げにそう言いながら、目は店主に向けていた。店主は神妙な面持ちで頷く。何が何だか、さっぱり分からなかった。

「あの～、ＣＤキープ？？２０年以上？？？」

黒石さんは僕の疑問には応えず、代わりに、店主から受け取った謎のＣＤをそっとテーブルのど真ん中に置いた。

「やっと出会えたんだよ。これは、君に渡す日のためにキープしていた、ということが今日、分かったよ。そして、君に渡す日というのが、今日だということともね！」

その声音は静かだが興奮に満ち満ちていて、狂気さえ秘めているようだった。充血した目はぎらぎらとして、今にも飛び出さんばかりに見開かれていた。

そのＣＤについて、黒石さんからどのような説明があったのか、まるで覚えていない。気づいた時には着のみ着ままで自宅のベッドに横になっていた。慌てて飛び起き、目覚まし時計を見ると、２３時半だった。ひどい頭痛だ。どうやって帰ったのかも分からず、ジーンズの右ポケットに手を突っ込む。財布があった。定期券が入っているのを確認した。なんとか自力で電車に乗って帰ったのかと、とりあえずは安心した。高石さんには自宅の住所を教えていない。それにしても、これほどきれいにさっぱり記憶が飛んだのは生まれて初めてのことだ。

なんとなく、鞄の中を開いて見た。あれ？これは何だ？何か、ある…ＣＤだ。なんでＣＤが…？

「あっ」

思い出したのは、ＣＤキープしていたと言って渡された物だということ。何故渡されたのか、はやはり思い出せない。とにもかくにも、これを聴いてみようじゃないか。

ＣＤコンポにディスクを挿入する。ヘッドフォンで聴こう。再生ボタンを押す。

こ、これは……

ジャケットに描かれた死神がニヤリと笑ったような気がした。にわかに意識が朦朧としはじめ、次第に呼吸が困難になる。目を閉じると、部屋中が浸水するのが分かった。洪水が四方から僕めがけてせめぎこんで来る、そんな音が聴こえるのだ。もう一度、今度は目を開けたら、すでに見慣れた一人暮らしの部屋はどこにもなく、自分はただ、深い海の底へと沈んでゆくばかりだった。音の一粒一粒に魂をすーっと吸い込まれていくのを感じながら、居酒屋での黒石さんとのやりとりを思い出していた。

（やっと出会えたんだよ。これは、君に渡す日のためにキープしていた、ということが、今日分かったよ。そして、君に渡す日というのが、今日だということともね　！）

そう言って、黒石さんはＣＤケースの中から一枚の歌詞カードらし

き紙を取り出して、それをよく読むように、と言った。ははあ。これは黒石さん流の、いわゆるサプライズだな。一期一会の感謝の気持ちを込めて、わざわざこんな手の込んだ演出を、居酒屋の店主まで協力させて。店主とはそれなりに親しいのだろう。常連だからか、あるいは、もともとの友人かもしれない。本当にこの人は、物好きの変わり者だ。でも、本当にいい人だ。感謝をすべきなのはどう考えても、僕のほうだというのに。

さて、ギフトのCDには一体、どんな応援歌が入っているのだろう。折り畳まれた歌詞カードを開く。これはまた驚いたことに、タイトルは”取扱い説明書”である。さすがは黒石さん、抜かりなく笑わせてくれるじゃない…いや、待てよ、これは違う。明らかにおかしい。歌詞カードではなかったのだ。これは確かに、文字通りのトリセツ。手が込んでる。ここまでされると、もうわけが分からず呆れてしまう。というか、ふざけすぎ、悪趣味なんですけど。

（黒石さん、こういう趣味ありました？）

思わず口に出して言ってしまった。そろそろサプライズの旗でも取り出すかな？と心待ちにしていると、しかし、黒石さんは急に、今まで見たことのない真剣な面持ちになったのだ。

”魂はまれに、溺死することがあります。用法・用量を守って正しくお使いください。”

”いわば、地獄への招待券です。”

（承認して頂けるなら、帰宅してすぐにでもリスニングを選択してくださいね。どうしても嫌だったら、回避手続きをこの店でやってくれますが、まあ、お勧めはしません）

（回避手続きとは？）

仕方なく、僕はこの”遊び”に付き合うことにした。

（僕が若かりし頃、飲み仲間から受け取りましてね、僕はまだ”行けない”から、断念しました。回避手続きとは、ＣＤキープのことです。ＣＤキープは向き不向きがあります。シマ君は向いてないかと…）

どういうことだ。僕は腹を抱えて大笑いした。そして、気がつけば自宅のベッドにいた。

溺死する魂、そういうことだったのか。

阿吽の呪い　～ことはじめ～（前書き）

もうずっと前の話になるだろうが、あるいは、つい最近の出来事のような気もする。

どんなに衝撃的な夢を見ても、目覚めた瞬間から急速にその輪郭が失われていくのと同様に、僕があの夏に体験したであろう出来事も、今となっては遠い夢物語である。いや、あれは現実などではなく、ただ己の眠りの中に見た長い長い悪夢そのものだったんじゃないか？と、何百、何千、何万回も反芻した。しかし、その度に、僕は揺るぎない結論に導かれてしまう。あれは現実に起きた。

なぜなら、僕は今でも時おり、”悪夢の実体験”の延長線上にあるとしか言い様の出来ないような後遺症に苦しめられているのだから。

そう、眠りの中に見る悪夢は後に引きずる事は無いのである。

この春に住み慣れた街を離れ、祖父母が暮らす母さんの実家に引っ越すことになった。僕は高校生になる。母さんとしては、生まれ育った地元の、親元に舞い戻ってきた形だ。５才の時に両親が離婚し

てから、僕は母さんと二人で暮らしてきた。いわゆる母子家庭だ。本当は兄弟がほしかった。できれば年下の、妹か弟がいい。父親は暴力的な人だったが、母さんは優しく、欲しいと言えば何でも買ってくれた。離婚してからは、それまで以上に優しくなった。でも、僕は幼い頃から欲の少ない子だったという。幼少期の母さんとの会話で、ぼんやりと覚えている事がある。冬になると、母さんがこう聞くのだ。

「欲しい物は何？」

僕は答える。

「うーん、なんにも」

「何でもいいから、言ってみなさい」

「じゃあ…いもおとか、おとおと」

それに対して、母さんがなんと答えたかまでは覚えていない。だが、思い浮かぶのは決まってとても悲しそうな母さんの横顔である。僕はこの記憶が暗示するように、心に闇を抱えた内向的な少年に成長した。その闇の奥にはなぜか、もう一人の自分がいて、そいつはとても明るいやつで、現実の自分とは正反対。いつしかそんな空想を抱くようになっていた。

後になって、その空想が真実に裏打ちされたものだったと思い知らされる。小学校の卒業を間近に控えた年末年始だったと思うが、祖父母の住む実家に滞在中、おばあちゃんが母さんとの会話の中でうっかり口を滑らせてしまった。その内容はあまりに衝撃的で、重たいものだった。

僕には生まれた時、兄弟がいたということを。双子の兄弟だったらしい。自分が兄で、弟は生まれて間もなく病気で息を引き取った。原因はよく分かっておらず、弟はまるで眠るように亡くなったというのだ。

当然だが、僕の記憶には弟の存在などあるはずもなく、彼が思い出されるわけはない。

しかし、幼少の頃から、僕は別人格の自分ともとれる存在をなんとなく想い描いてきた。双子の弟の存在は潜在的に魂に刻まれていて、本来、自分と共に成長するはずだった弟の姿を、僕は空想の中に見ていたのかもしれない。

僕の手元には今、一冊の日記がある。

引っ越し作業のために一日中家に引きこもり、必要な物はおおかた段ボールに詰め終え、そろそろ日も沈むかという時だった。休憩がてら小中学校の卒業アルバムでも見ようと思い、まずは直近に卒業したばかりの中学の卒業アルバムを開き、少しばかり思い出に浸った。それから、懐かしの小学校の卒業アルバムに手を伸ばした。分厚い表紙を開くと、唐突にそれがするりと落ちてきたのである。なんだ、これは?小学生がよく使う落書き帳で、表紙は子供のパンダの写真。そういえば、小学校の卒業アルバムは久しく見ていないが、卒業アルバムに挟んでおくとは、何か意味があるのだろうか。嫌な予感がした。

それは何月何日何曜日とその日その日の出来事を綴る日記の形をとっていたが、読み進めるうち、ある日を境に、日記はもはや日記の体裁をなくしている事に気づいた。不思議な事に、過去の自分が未来の自分に向けて語りかけているような…これが未来の自分に何を訴える物なのか、すぐに思い当たった。今では遠い夢物語となり記憶の奥底にすっかり埋もれつつあった、あの夏の出来事。ああ、これの後遺症はまだ続いている…

キーンと、魂に直接響くような鋭い耳鳴りがした。

（これ以上読んではいけない）

心の声が聞こえる。

（読みたい、読んでしまいたい）

という声も同時に聞こえる。一度は日記を閉じた。そしてビリビリに破いて捨ててしまおうと強く念じたのだが、何かがそれを思いとどまらせた。

（読みなさい。そうすれば楽になる）

キーンという耳鳴りはいっそう強くなり、僕は思わず両の耳を塞ぐ。しかし、抗えなかった。僕は吸い寄せられるように日記を読み進める。四方八方から洪水のごとく押し寄せる記憶の轟音が、僕を強引にあの夏へと引き戻すのが分かった。

阿吽の呪い　～ことはじめ～

僕の名前は遠山和守（トオヤマカズモリ）。

この春、小学六年生になった。この六年間ずっと、背の順ではいちばん前。みんな、僕のことをチビとかヘンコとか言う。でも、お母さんは言ってくれる。お前は心が大きいんだよ。だから、将来はきっと大物になるよ。

僕は大物になんかなりたくないけど、歌を歌うのが好きなので、歌手になりたい。それが僕の夢だ。音楽の成績はいつもフルテンだった。六年生でも絶対、フルテンをとりたいなあと思う。フルテンというのは、おっちゃんが教えてくれた言葉だ（おっちゃんは、お母さんの新しいカレシなんだ。お父さんじゃあない）。それは、楽器を演奏する時、音をできるだけ大きく鳴らす事なんだって。それをしたら音楽の世界ではすごくカッコイイんだって。それで、成績もいちばんいいのがフルテンなんだって。

僕もいつか、おっちゃんみたいなフルテンの楽器を演奏する歌手になりたい。今は小学生だから、リコーダーでフルテンの音を出す。それで、みんなが和守くんリコーダー上手だねって褒めてくれる。でも、僕は本当は全然満足じゃない。みんなのリコーダーも、僕のリコーダーも、おっちゃんが演奏する楽器みたいな音は出ないからだ。おっちゃんはギターを演奏する。おっちゃんは、フルテンがいちばんカッコイイ楽器はギターだと言う。本当にその通りだと、僕も思う。

僕は四年生の時、おっちゃんの演奏会に行った。ロックっていう音楽の種類で、おっちゃんを含めて三人で演奏していた。おっちゃん

はギターを演奏しながら歌を歌っていた。他の二人は、ギターによく似た楽器の人と、太鼓の人がいた。バンドってめちゃくちゃうるさいんだって聞いた事があったけど、実際に聞いたら思ってたよりもめちゃくちゃうるさかったんだ。一緒に観に行った友達のヨシオくんは、耳が痛いと言って、途中でおばちゃんと家に帰ったくらいだ。でも、僕はロックはめちゃくちゃうるさいけど、めちゃくちゃカッコイイなあと思った。演奏会が終わった後、汗だくのおっちゃんがステージから降りてきて、これが本当のフルテンの音だよ、と言った。

僕はそれから、お母さんと一緒によくおっちゃんの家に行くようになった。それで、そのたびにロックのＣＤを聞かせてくれたし、貸してくれた。おっちゃんの家には山ほどＣＤが置いてあるんだ。おっちゃんに貸してもらったＣＤは、外国のロックで、外国の言葉で歌うから何を言ってるか分からないけど、すごくカッコイイ音で演奏してる。ビートルズはメロディーが分かりやすくて、僕は鼻唄ならできる。ローリングなんとかは、満点じゃない事を歌った曲がおっちゃんのお気に入りらしい。おっちゃんはその他にも色々なすごい音楽家の事を教えてくれた。その中でも、おっちゃんがいちばん好きなのはジミ・ヘンドリックスという人らしい。その人はギターをすごい音量のフルテンで鳴らし、めちゃくちゃだけどものすごい上手に演奏し、演奏が終わるとギターを燃やしたらしい。実際にＣＤを聞いたけど、これを演奏しているのは本当に僕と同じ人間なのか、僕には信じられなかった。

「この人はもしかしたら、神様かもしれないな」

おっちゃんは僕が思った事をそのまま口に出して言ったから、僕はびっくりした。

ロックの話をいっぱいしてくれた以外にも、おっちゃんは好きなものが沢山あって、『ゴジラ』や『スターウォーズ』の映画を見せてくれた。あと、『モスラ』のオモチャも集めてて、おっちゃんは家ではコレクターなんだって。コレクターは、好きなものを沢山集めて家に飾るらしい。僕はあんまり好きなものがないから、コレクターには向いてないと思う。でも、漢字が得意だから、本は学校や図書館でよく読んでる。音楽の次に、漢字が好きなんだ。でも、国語はまだフルテンをとった事がないから悔しい。

僕が五年生になると、僕とお母さんはおっちゃんの家で暮らすようになった。おっちゃんの家にヨシオくんを呼んで、ビートルズの音楽を聞かせたけど、ヨシオくんは好きじゃないって言うんだ。さらに、ジミ・ヘンドリックスの事は、どう考えても下手クソじゃないかと言った。ヨシオくんはジャズというお洒落な音楽が好きらしい。それで悔しくて、学校の他のやつらにも聞いてほしいから、学校におっちゃんのCDを持っていったら、そいつらはラップっていう音楽が好きで、僕が持ってきたおっちゃんのCDを壊したんだ。それで、こう言った。

「キチ＊イが聞いてるのは、キ＊ガイミュージックって言うんだよ。覚えとけ」

キ＊＊イが何か分からないけど、きっとすごい悪口なんだと思った。僕はとても悲しかった。家に帰って、正直にその事を言ったら、おっちゃんは今まで見た事がないくらい怖い顔になって、僕を蹴ったり殴ったりしたから、昔のお父さんを思い出して僕はとても悲しくなった。でも、悪いのは僕だ。勝手におっちゃんのCDを学校に持って行ったりしたから。

僕は悲しい時、僕の中にいる”もう一人の僕”に話を聞いてもらう。

もう一人の僕は、僕によく似た顔で年も同じだけど、僕と違って明るい性格だ。僕はあんまり喋らないし、友達もヨシオくんだけだけど、そいつはよく喋るし、友達も絶対多いと思う。僕はもう一人の僕と夢の中で会って話をするけど、お母さんもヨシオくんも信じてくれない。信じてくれるのはおっちゃんだけだ。おっちゃんは怒ると怖いけど、もう一人の事はよく分かってくれた。”お前はチエオクレだから、もう一人のお前と会えるんだ、他の人には出来ない事だ”と教えてくれた。チエオクレって何だろう?これはいくら聞いても教えてくれなかったけど、もう一人の自分と会って話が出来るんだから、きっとすごい事だと思う。僕の得意な事は、音楽と漢字とチエオクレですと、今日、国語の授業の作文で書いた。先生は大笑いして、ものすごく褒めてくれたよ。

僕が六年生になった事は、最初に言ったと思うけど、これから話す事は、誰にも言ってはいけないよ。君はもう一人の僕だから、特別に教えてあげるね。僕がこの夏、”音の神様”と会った話を。

阿吽の呪い　～ことはじめ～（後書き）

『阿吽（あうん）の呪い』本編は次話に続きます。

阿吽の呪い　〈一〉

思い出した。

おっちゃんの名前は響護（きょうご）と言った。顔の下半分をもじゃもじゃの無精髭で覆い、髪は敬愛するジミヘンさながらのバクハツ頭、ただし、これは厳密にはアフロではないのだが、鳥の巣を模した天然パーマの一種である。

日本社会での職業は本人から聞かされなかったし、また、僕はついに知る機会を失った。しかし、彼の本業はおそらく、あの異世界における中堅の役人であり、門番だったのだ。

僕は小学校最後の夏休みのある日、響護に連れられてドライブに出かけた。僕は助手席に乗った。どこへ行くのか問うたが、彼はただ、ちょっと遠くへとだけ答えた。家を出たのは午前六時頃。だからその日は、夏休みの日課である地区のラジオ体操を欠席した。

車内では、ラジオを聞いた。ラジオは午後からの悪天候を報らせた。この地方一帯では雨が降るらしい。

「雨かあ、嫌だなあ」

と僕。実際、昔から雨は嫌いだった。雨の日には外に一歩も出たくないし、あのザーッという降り注ぐ雨音を耳にするのも嫌いだ。

響護は目尻にしわを寄せ、何やら笑みを浮かべたかと思うと、真顔でこんな事を言った。

「雨は天からの贈り物だ。雨が降らなければ、我々は身も心も干からびてしまうだろう。ありがたい事なんだよ。

でもな、和守、時に雷雨には用心しろよ。雷は、神様のお怒りかもしれない。雷の音、あれはこの世で聞ける数少ない神様のお声なんだ」

僕は、へえそうなんだ、と空返事をした。

彼は中々の喫煙者だった。信号待ちで素早く赤のマルボロを取り出しては勢いよく吸っては吐き、信号が青に替わると火をもみ消してただちに発進する。自動車でも排ガスを吐き出すのだ。ただし、吸い殻を窓から投げ棄てる事はしない。

外ではいつも、シガレットケースを持ち歩き、灰皿も携帯していた。この辺のマナーは心得ていて、環境重視の粋な男でもあった。

十時頃、サービスエリアに立ち寄り、朝昼兼用の食事をとった。僕はカレーライス、響護はラーメンを食べた。

再び車に乗ると、響護はカーステを流し始めた。ニルヴァーナの曲だったが、曲名は覚えていない。

「これの歌い手は、今じゃ伝説のロックの殉教者だ。彼は成すべき

事をやったよ。カートは歪みを愛した。歪みの深さは、怒りの深さだ」

そう言って、響護はあの有名なリフを鼻で唄う。

フルテンとか歪みとか、いかにもロック好きのおじさんらしい。響護のこの手の説明を、僕は少々煙たくも感じていたのだが、この頃にはすっかりこのおっちゃんに影響されて、ジミヘンやレッドツェッペリン、ビートルズに心酔していたのは、言うまでもない。

いや、今にして認めたくはないが、この頃の僕はこの、風変わりなおっちゃんその人自体に心酔していたようだ。

景色は街並みを遠ざけ、やがて山道のただ中を登ったり降ったりした。その間、僕らは会話らしい会話を交わさなかったし、僕はカーステは止めるように要求し、浅い眠りを漂った。サービスエリアを出てさらに約一時間、ようやく目的地に到着した。時刻は正午を回っていた。

そこは、人里離れた山奥にひっそりとたたずむ、まるで廃墟のような古寺だった。真夏の白昼にも関わらず、不思議なくらい涼しくて、少し肌寒いくらいに感じたのは、その場所の発する、ただならぬ気配、霊気のせいかもしれない。

「云々寺（うんぬんじ）だ。ある人はパワースポットなんて言うが、俺は単に“扉”と呼んでる。俺の家系は代々この寺を管理してる　、いわば門番だ」

響護の後に続いて、寺の中に入った。寺の前に立った時から感じていた強い何らかの気配は、いよいよ充満していて、突然、急激な耳

鳴りに襲われた。

そうした気配なり霊気、耳鳴りの原因であろうモノは、ただちに眼前に姿を表した。一体の、それはそれは恐ろしい出で立ちをした仁王像だった。

小学生の和守には、仁王像とか金剛力士像の知識は無かったが、今の僕なら知っている。これによく似た仏像を歴史の教科書で習ったからだ。

仏像の形をとったそれの発する霊力は、小学生の僕を圧倒した。神々しく、禍々しくもあり、茶褐色だが自ら光を発しているような存在感は、今にも動き出して自分を襲いかかるのではないかと思われた。口は固く結ばれていたが、端と端は下方に押し曲げられ、全て怒りの表情を表していた。

「和守よ、お前は運がいい。目の前に在らせられるのはまさに音の神様だ」

響護は小学六年生の僕に向かい、少々難解な、それとそれの属する異世界についてのあれこれをとうとうと語った。

「例えば…ギターという楽器には1弦から6弦までの六つの弦がある。六つの弦にはそれぞれの役割があり、AコードやGコードといったコードを押さえる事によってはじめて、綺麗な秩序ある和音を発する。

チューニングが狂っていたり、間違った押さえ方をすれば、美しい音は出せないし、不協和音となるね。

それと同じように、美しい音の連なりで形を創る世界があるんだ。
ネシン界だ。

このお寺はネシン界に通じる秘密の扉なんだ。目の前の御仏像は、一見仏像の形をしているが、本当は仏像じゃない。

元はネシニンと呼ばれるネシン界の住人の主だったが、その力を失い、扉そのものとなった。そして俺はこの扉を守る番人で、音守（オトモリ）と呼ばれてる。重要な仕事だよ」

そこまでをよどみなく言い切った。

もちろん、僕にはほとんどその意味が分からなかったが、音の神様だとか、音の世界とかいう現実離れした話に恍惚としていたし、胸を踊らせてもいた。と同時に、なんとも筆舌しがたい恐怖心もまた抱いていた。

「ははは。チビるんじゃないぞ。

たしかに恐ろしいお顔だ。この方の本当の名前はウンヌンだが、仏教では仁王像の吽形（うんぎょう）と言って、怒りを秘めた表情を顕す。本来はもう一体、阿形（あぎょう）という大口を開けた仁王像と二人で一対の守護神なんだが、阿形の方は別次元に…まあ、和守には少し難しい話だな」

よく分からないが、小六の和守にも、普通に生きていれば、ほとんどの人間はこの寺に立ち寄る事も無ければ、ましてやネシンという世界に関わる事の無い事は感じていた。

「おっちゃんは、なんで僕をここに連れて来たの？」

「いい質問だ。理由は単純に、お前が音楽を好きだからだ。ネシン的に言えば、音知数（おんちすう）が高いという事なんだが。」

「僕、音痴かな？」

「音知数とは、ネシン界に存在する音を聴きとる能力の事だ。音知数が高いほど、よりたくさんの音を知る事が出来る。

逆に、音知数が低い者には、そのぶん聴こえない音がある。普通の人間なら、ネシン界の発する音を聴く事も触れる事も出来ないし、その存在を感じる事は無い。音知数が低すぎるからだ。

お前は無意識にネシンの存在を感じている。ここに着いた時、ネシンの音を聴いたはずだ。そして、今この瞬間にも」

はあ、なるほど…言われてみればたしかに、今この瞬間にも耳鳴りのような感覚が続いている。

これか。これがそうなのか。

「で、お前にやってもらう仕事はだな。ゆくゆくは俺の仕事を引き継いでもらいたいんだが、そのためには長い修行が必要だ。そこで今は、ネシンの洗礼を受けて門徒（もんと）となり、俺の下で働いてほしい」

ん？ネシンとか音の神様とか並べ立てながら、結局は謎の宗教に勧誘されているわけか？それにしても、強引なやり口だ。

話が分かったようで、全く分からない。まず、信じろという方が難しいし、これでは頭のイカれた音キチおじさんの狂言ではないか。

そんな僕の心を見透かしたように、彼はこう続けた。

「お前は俺の言うことに疑いを感じてるらしいな。仕方がない。一つ、お前が公的ネシニンとなる資格のある者かどうかを試そう。簡単な仕事だ。

ネシン界に仇なす烏天狗（からすてんぐ）の商ん人から煙草を買ってほしい。“根の国のケムたばこ”で通じる。幻想的な深い味のする煙草だ」

そうまくし立てると、響護は懐から何やら黒光りする卵形の石を取り出した。

「天狗には物々交換だ。これを持っていけ。“ヨミの夜泣き石”と言って、奴らは喜ぶだろう。」

なんだか不気味な名前だ。

「烏天狗は、悪者？どこに住んでるの？ネシン？」

「奴らの住みかはネシンの外れにある、浮かれ山だ。と言っても、日本にある。ネシン界はどういうわけか、この世界にも一部を占めている。人知を超える世界だから、説明しがたいよ。

烏天狗にもいくつもの部族がいて、その中でもネシニン天狗がネシン界に巣食う。シインというネシン界を構成するマテリアルを収集していて、それがネシンの安定を妨げる。まあ一概に悪とは言えんがな」

響護は、一日考えて決めろ、無理に引き受けなくていいから、と言

った。

本心から、出来れば恐ろしい難儀には関わりたくないと思った。不吉な予感がした。これまでの、変人だが音楽を愛する優しいヒッピーおじさんのイメージが一変し、おっかない闇に忍んで生きる魔法使いに思えてきた。

しかし、少年に元来宿る冒険心はことのほか膨らんでいった。

要は天狗に会って買い物に行けという事か。僕はしばし思案にふけ、ある種のゲーム感覚でこの仕事を引き受けようと心に決めた。

「日が暮れる前に帰ろう。野寺坊（のでらぼう）が出るからな」

野寺坊が何者なのか、もちろんその時の僕は知らない。後で知ったところでは、一種の妖怪変化らしい。

寺を出る頃には予報通り、雨が降ってきていた。山の天気は変わりやすい。少年の心も変わりやすいものである。

この夏の怪談に足を踏み入れた僕はもう、逃れられない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9593ci/

地獄耳倶楽部

2015年6月17日21時50分発行